
転生しちゃった勇者様

mental

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生しちゃった勇者様

【Nコード】

N6838F

【作者名】

mental

【あらすじ】

魔王との激闘で敗れてしまった勇者は、天国のような綺麗な場所
でこの世界の女神と会う。勝手に魔王を倒すという宿命を押し付け
たことを謝罪した女神は、勇者に普通の人生を歩んでもらうために、
普通の人間に転生させようと試みるのだが、女神はそれに失敗して
しまつて、勇者は魔族の少女へ転生してしまつて——！？作者のノ
リとアドリブで描かれる、超ハイテンションミラクルファンタジー
！

00：「魔族の女の子に転生させちゃいました」

温かい光に包まれて、僕は静かに目を瞑った。

そこに苦しみなんてものは微塵もない。あるのは安らぎ。温かく僕を包み込む慈悲の光のみだ。

僕は勇者“だった”。数えきれない人々に希望を託されて、数え切れない人々の希望を背負った光の剣で、魔王の討伐に向かった。

でも、負けた。僕が世界を想う力より、魔王が世界を手中に収めようとする野望の力の方が強かったのだ。一対一で剣を交わらせたのだが、圧倒的な力に押されて結局斬られた。

後悔はしていない、僕は全力で戦ったのだから。伝説の武器防具、鍛練で鍛えた戦闘力。全ての力を以てしてもダメだった。でも、全力を出したのだから、後悔する理由なんて全く無い。

「勇者様——」

高く澄み切った声が、僕のことを呼んだ。今まで一度も聞いた事の無かったような、綺麗で惚れ惚れする声。

これが神様の声なのかな。そしてそれが聞こえてこの不思議な場所にいる僕は、死んでしまったのかな。

「私はこの世界の女神。貴方は魔王を討つ事が出来ず、死んでしまいました」

ああ、やっぱり。ならここは天国だろうか。この温かい心地よさがある光が、地獄だとは到底思えないし。

「貴方に魔王を倒せと、無責任に職務を押し付けたのは私です。申し訳ありませんでした」

罪悪感の籠った、少し泣きそうになった声で、女神は僕に謝罪をした。そういえば、僕が魔王を倒すために旅立ったのは、女神のよくな人から「魔王を倒せ」と言われる夢を見たからだ。

これがその時の女神なのだろう。まあ、今周りは黄金の光だけで、人らしい姿は何処にも無いのだが。だが、確かに声はその時の女神

そつくりだ。

「せめてもの償いとして、私は貴方を蘇らせたいのです。勇者や魔王とは全く関係ない、普通の人間として」

女神の発言に、僕ははっと顔を上げた。もう一度人生がやり直せるんだ。まだ暫く眠ることはできなくなるが、真つ当な人間として一から人生がやり直せる。僕だって一度は普通の人間として生きたいし。

僕はすぐに頷いた。確かに天国にも行きたいけど、その前に普通の人生を一度くらい体験したって罰は当たらないだろう。

「分かりました」と言った後、女神は呪文らしき言葉を呟き始めた。僕達が使っていたことじゃでは表せない発音だが、歌のように綺麗で整った旋律が、光に満ちた空間に流れる。

「あ」

余りに心地よく綺麗な旋律で思わず眠ってしまいそうになったのだが、女神の思わず何かをやらかしてしまったという感じの声で、現実に取りもどされた。

「どうかしましたか？」

何故か背筋に悪感が走ったんですけど。物凄くいやな予感がするんですけど。恐る恐る何が起きたのか女神に聞いてみた。女神は暫く黙ったきりになり、その場の空気が重くしーんとしたものになるが、暫く経ってその重い口を開いた。

「間違つて、魔族の女の子に転生させちゃいました」

女神の言葉が頭の中で何回も再生させられた。間違つて、魔族の女の子に転生させちゃいました、間違つて、魔族の女の子に転生させちゃいました……。

頭の中でそれを整理する。魔族とは僕達人間の敵で、魔王に支配されている種族。僕が倒そうとした種族だ。女の子はそのまま、女性という事だろう。転生も、生まれ変わらせてあげようという話が上がっていたから、そのままの意味だろう。

頭の中が真つ白になる、何も考えられなくなる。そのままの状態

で暫く硬直状態が続き、やっと何かを考えられるようになって。

「ええええーっ!？」

叫べるだけ叫んだ。もう咆哮と間違えられてもおかしくないほど叫んだ。自分の耳が痛くなるほど叫んだ。

魔族の女の子って、魔族の女の子って。やばいパニック状態だどうしよう! 敵である魔族になるだけでなく、女になってしまっている!

「そ、それは今から止められないんですか!？」

「無理ですよ!？ もうあと数十秒で貴方は晴れて魔族の少女に転生ですよ!」

正直女神もパニック状態なのか、どうしようどうしようという眩きがいきり聞こえてくる。

というか数十秒って早すぎでしょ。心の準備を付けるような時間も与えてくれないのか。というかそれ以前に何で自分でやったことを取り消すことができないんだ。この女神。

「こうなったら、最後に言いたい事を言ってから転生してやります!」

「ええ、どうぞ!」

最早パニック状態を軽く通り越していて、僕も女神も壊れている。もうこうなったらどうにでもなれってんだ!

「いってきます」

「いってらっしゃい」

その言葉を最後に、僕の意識はブラックアウトした。

00:「魔族の女の子に転生させちゃいました」(後書き)

初めまして、mentalと申します。まあこれの前にもう一作品投稿してますから、見たことある人もいるかもしれませんが。

最初に言っておきますが、この小説はノリとアドリブで書いてます。なんかもうどうにでもなっちゃえ！って感じです。

ノリって大事だと思うんですよ。やっぱり小説っていうのは勢いがなくちゃいけませんよね。まあこれは少々飛躍的過ぎだとは思いますが(汗)

修正で、主人公の心情描写を少し増やしてみました。

01:「その方が面白いからです」

温かく心地よい光が消えた。何も感じなくなった。

僕は一筋の光に包まれて、ゆっくり地上へと着地する。僕が大地に足を置くと、光は少しずつ消えていった。

「とりあえず、どうすればいいんだろ……」

自分が発言したのに、僕はその瞬間自分の口をあわてて押えた。なんですかこれ、凄く声が高いんですけど。しかも凄いいり声なんですけど。なんかもう苦笑いするしかないんですけど。

やっぱり自分は魔族に転生してしまったのだろうか。恐る恐る自分の体を見ると体が小さくなっていて体系もかなり変わっていた。僕が魔族の少女になったことは間違いなさそうだ。

とりあえず、ここが何処かを確かめるために、辺りを見回した。辺り一面草木に包まれていて、夜風に吹かれて木の葉がざわざわ揺れる。どうやらここは森らしい。それと、今は夜のようだ。

頭の中の記憶を思い出して、ここが何処か確かめようとする。僕は勇者として殆どの場所を旅した、知らないところは殆どない。――のだが。

「……あれ？」

どうしようこれ。前世って言うのかな、とにかく勇者だったころの記憶が思いだせないのですが。自分の事とか親のこととか、そういうことは覚えてるけど。だけど、僕が死ぬ前に何をしていたか全く思いだせない。まあ、あの女神との会話としたことは覚えているが。

ようは、自分の身の回りや立場のことと、あの天国のような場所での出来事しか覚えてないわけだ。勇者として冒険した記憶も勿論ない。

「自分で歩いて事ですか？ ははは」

それは流石に酷でしょう、まあ勇者やってたおかげでこういう事

態には慣れてるけど。記憶はないけど。まさか新たな人生を始めたその瞬間から苦勞することになるとは。まあ、始まる少し前から狂った人生だけだ。

とりあえず、近くで木の棒を拾ってそれを倒し、倒れた方向に進むことにした。倒れる方向が殆ど木のある場所で、道がある場所に当たるまで五回はやったけど。

「……うわあ」

数時間後、ようやく森を抜けた僕の目の前にあったのは、城だった。思いつきり魔族ですって感じの悪魔の象られた国旗が掲げてるから、魔族の城なのだろう。

その城は高級感と威圧感を感じらされる大きな城だった。もう城というより要塞のクラスに入るほど大きくて、壁は埃一つなく磨きあげられていた。

この中に入って誰かにここが何処か聞いて、ついでに食糧とかを分けてもらおう。そう考えた僕は城の扉に手をあてた。自分の異様な程の手の小ささと白さに違和感を覚えながら、僕は扉を開く。

「待ってください」

中に入ろうとしたとき、聞き覚えのある声が聞こえてきて僕は辺りを見回した。高くて澄み切った綺麗な声、忘れるはずかない。僕がここにいる原因を作った人物の声なのだから。

「わ、わたしです、ぷぷ……女神です、くすつ……」

なんか女神様凄く笑ってるんですけど。もしかして僕の姿ってそんなに酷いの？ ああ、あとで鏡見るのが怖くなってきた。

「突然で申し訳ないんですけど、貴方は今日から女言葉を使い、女として生活してください」

言っている意味が暫くの間分からなかった。だが、単語の意味を一つ一つ考えていくとその文章の意味はすぐに分かった。

ようは完全に女として生活しろ、という事だろう。でも、何で僕

にそんなことを頼むのだろう。

「理由は簡単ですよ」

僕の心を読んだかのように彼女は悪戯をしているような様子で話し始めた。

「その方が面白いからです」

女神に殺意を覚えた。いや、だって面白いつて理由で人にそんなことを頼むなんて。まあ僕は肉体的には女なんですけど。

そんなこと僕はやるつもりはない。僕ははっきりと女神に一言言った。

「やるわけないじゃないですか」

「やらないともっと酷いものに転生させますよ？」

「すみません僕が悪うございました、是非やらせてください」

女神への殺意五十パーセントアップ。まさか普通の人生を楽しむためと生まれ変わった人生でこんな目に逢うことになるとは。

「それじゃあ、もう入りますんで」

「ちゃんと女らしい口調で話してください」

「……それじゃあ、もう入りますから」

なんかこの先の人生がかなり不安になってきた。というか僕と話せるのなら初めからここがどこかとか教えてくれればいいのに。

01:「その方が面白いからです」(後書き)

ちよつと文章を詰めてみましたが、どうでしょうか？

まだ超ハイテンションミラクルファンタジーにはなってませんね。

主人公の性格が冷めちゃってるので、どうしてもキャラが出なくてはそうならないわけですが(汗)

修正で、主人公の心情描写を少し増やしてみました。ついでに冷めすぎの主人公の性格を少し明るくしてみました。

02：「あはは、これが僕の姿……？」

で、何故か僕は城に足を踏み入れた途端、厳つい魔族の男たちに担がれて、いかにも魔王ですと言わんばかりの容姿の人物の座る王座の目の前で投げ捨てられたのですが。

投げ捨てられた僕を、魔王は物凄く人相の悪い目で見てきています。わあなんか凄く怖い怖い。前世の自分はこれに立ち向かって行っただけですか？ 我ながら凄すぎる。

「森であの光を出したのは、お前か？」

威厳のある声で、マントで体のほとんどを隠しながら魔王は僕に問いかけてきた。

森、光。そういえば、僕が転生したときそれらしい光が出てきてたけど。もしかして魔王さん怒ってらっしゃいます？

「……たっ、確かにそれはわたわた私がやりまししたけど、何か問題ありっ、ありましたか？」

はっ、恥ずかしい。誰もいないところだったからさっきは普通に女神の言うこと聞いたけど、人の目の前で女言葉で喋らないといけないなんて。

しかもなんか女神の笑い声が聞こえてくる。爆笑なせいか机をたたく音と一緒に。恥ずかしい。とにかく恥ずかしい。

「そうか。近隣の住人達に迷惑がかかっている、今度からは気を付けろ」

そう言っ、魔王は僕の横を横切って部屋を出て行った。てか、それだけですか。それだけの為に僕をここに呼んだんですか。

まあいいや。せつかく中まで連れてきてもらったし城の中を探索してみよう。来る途中普通の魔族も歩いてたから（担がれてる僕を笑っていたけど）城を自由に歩き回っても良いみたいだし。

「つい……け、う………し………！」

部屋から出る魔王が小声で何かを言った気がしたが、僕にその声

は殆ど届かなかった。

「あはは、これが僕の姿……？」

城の中心だと思われる場所には、ご丁寧に巨大な鏡が置いてあった。

軽く普通の公園四個分はありそうなその場所は広場らしく、中央には噴水があり、その周りにベンチが設置してあった。たくさんの魔族が談笑しているその場所に、一緒に鏡も置いてあったのだ。

その鏡は、偽りなく僕の姿を映し出してくれる。僕が見た鏡の向こうの自分は、うわこれどうしようと苦笑いを浮かべた、小学四年生程の幼い少女だった。顔があつて、手と足が二本ずつあつて……と、肉体の造りは人間と変わっていないのだが、肌はもう病氣じゃねと疑うほど白く、目と髪は紫の色をしていた。顔のつくりはなかなか繊細だが童顔で、美形というよりは可愛いだ。

「今更ですけど、元に戻すということはできないんですか？」

「何だか楽しくなってきたので、元に戻しても戻す気はありません」女神ってそういう趣味だったのか！ と途端に世界の治安について心配になる。

というか僕が生まれ変わったのって、普通の人生を送るため、だったはずですよ。なのになんで女神さまのおもちやに変わり果てているんですか。

「もう手遅れかもしれませんが、やっぱり天国にいかせてください」

「口応えするならもつと酷いものに転生させますよ？」

「もうそのネタ二回目じゃないですか」

「そんなに酷いものに転生したいですか。ネズミなんてどうですか？」

「……すみません」

もう嫌だ、僕の人生。もとい魔生。ただでさえ自分の敵に転生してしまったのに、もっと酷いものに転生させるぞと脅されるなんて「あの」

そんなことを考えていた時だった。背後から突然少女らしき声が僕を呼びかけたのは。

02:「あはは、これが僕の姿……?」(後書き)

そろそろ他の登場人物が出てきます。そしてそろそろ魔族の少女になったことで起きた出来事のエピソードを書こうと思っています。

03：「あ、すみません」

そこに居たのは、魔族ばかりいる城では場違いなほど大きく白い翼が背中から生えている、金髪金眼のどこからどう見ても天使な少女だった。

あれ、ここ魔族の城じゃなかったの！？ と戸惑ってしまうが、暫く考えると何故彼女のような天使がここに居るのが分かった。魔族という言葉の定義と範囲は以外と曖昧なのだ。魔法を使える知的生命体を魔族、魔法を使えない知的生命体を人間と呼んでいるだけのことだ。まあ、人間にもたまに魔法が使える人間が生まれるけど。

ようは、天使も魔族に分類される生物なのだ。だから天使の少女がここに居ても別に不思議ではない。

「さつきから鏡の前に立ってぶつぶつ独り言を仰っていますけど、大丈夫ですか？」

心配している様子で、天使の少女は僕に近寄る。ああ、この人生（もとい魔生）を踏み出して初めて人の温かみを感じたよ——。つて、ちよつと待て。

別にひとりじゃべってたわけではない。僕はちゃんと女神様と話してて……。つてまさか。

「もしかして、女神さまの声って、他の人には聞こえないんですか？」

「当たり前じゃないですか」

ああ、やつぱり、と僕は肩を竦めた。これじゃあ女神というより唯の疫病神だ。そんな僕の反応を見て女神はまた笑ってるし。

「だ、大丈夫です。ちよつと頭痛がするだけなので」

「頭痛が！？ すぐ病院に行きましょう！ 今すぐに！」

「あ、いいえ、大丈夫です。痛いといっても少しだけなので」

「いいえ、少しだけでも痛いなら病院に行きますよ！」

誤魔化すために仮病を使ってみたけど、逆効果だったみたい。天使の女の子は只管病院に行きましようと僕の腕をひっぱる。

ああ、どうしよう。病院に行ったら僕お金とか持っていないしな。というか魔族に病院なんて要るの？ 治癒魔法があるのに。

まあ、仕方がない。ここで断ったりしたらせつかく心配してくれてるのに失礼だし、行きながらもお金を持っていないことを説明すればいい。行ってみよう。ああ、自分の人の良さが嫌になってきた。

この城は、様々な生活に必要な施設が整っているらしい。

広場から少し外れて階段を上り上の階に行くと、そこには確かに病院らしき場所があった。途中通った場所も商店街のような雰囲気を持っていたし、魔族の城というのは一つの街も同然のようだ。

さっきまで通った場所やそれ以外の城の内装の壁は茶色のレンガだったのだが、この部屋だけは白くレンガ造りではないようだ。薬品のあまりいい感じのしない匂いが漂っていて、沢山ある棚には医学用具がギッシリと詰まっている。本格的な病院だ。

自分がお金を持っていない旨を伝えても、天使の少女は「私のお金で払います」と治療費を出してくれた。本当は頭痛じゃないのにと心が少し痛い、流石にここまで来て本当のことは言えず、僕は観葉植物が傍に置かれたイスに座って自分の番を待っている、冗談抜きで心が痛い。

「ユウ様はおられませんか？」

看護婦らしき魔族に名前を呼ばれて、はいと返事して診察室に入った。ちなみにユウというのは病院で診察してもらうために名前は何かと聞かれ、女神に即席で作ってもらった名前だ。名前の由来は女神曰く「元勇者だから勇者のユウです」らしい。

診察室はあまり大きな部屋でなく、レントゲンの写真を張るボードらしきもののついた机の向こうに、この病院の先生らしき魔族が

座っていた。白衣で胸には聴診器がかけられている。物腰柔らかそうな白髭の老人だ。

「どんな症状が出ているんだい？」

「ええつと……、少し頭が痛いんです」

とりあえず正当回答。医者はふむと少し何かを考える動作をし、僕の体に聴診器を当てる。

「っておいお医者さん！ 何勝手に人の服めくって聴診器当ててるんですか！ 自分が女になっていることを意識してしまい、僕は聴診器を持つ医者の手を振り払ってしまう。」

「あ、すみません」

行動してから自分のやってしまったことに気が付き、僕は謝罪した。医者はまあいいという顔で再び僕の服をめくり聴診器を当て始める。

我慢だ我慢だ。なんか無性に恥ずかしい気持ちが入み上げてくるんですけど。ああちょっとそんなに僕の顔見ないでください。なんかお医者さん心なしか鼻息荒くありません？

こうして、僕にとっての地獄の診察が始まった。女神笑うな。

03:「あ、すみません」(後書き)

書いてから後悔するってこういうことですね。うん、性転換って難しい。

やっぱり自分男子ですから女性の気持ちを理解するのは難しいですし、何か「これ卑猥」と防御が脳で働いてあまり大それたこと書けませんし。

でも、頑張ってやっていきたいと思います。皆様これからも応援よろしく願います。

04：「服を買いに行きませんか？」

「あ、診察どうでしたか？」

「地獄だったよ」

「……どういう意味でしょう？」

「女言葉を使いなさい！」

何かもう地獄だ。診察は医師の性格がアレだったので酷い目に会ったし、天使の少女には女神の声が聞こえないあんど事情を知らないから色々ややこしいし。それにもし事情を話したら女神に色々言われそう。

「はい、その通りです」

ご本人もそう仰っておられます。しかも凄い満潮の笑みで。邪気一つないその笑みが逆にム力つく。

「本当に大丈夫ですか？」

はあ、とため息をついた僕を見て近寄ってくる天使の少女。確かに何もなかったところに向かって何か話したりしたら気味が悪いよね。

それにこの少女、かなり心配症らしいから正当な理由を作らないと納得してくれなさそう。ここは多少強引な理由でもいいから何か作らないと。

「う、宇宙と人たちと交信できるんですよー」

「そうなんですか！？」

とっさに考えたアホらしい理由で何故か簡単に丸めこむことができた。彼女はだまされやすい性格のようだ。

「というか全然正当な理由じゃないですか」

仰る通りです。

「それにしても、ユウさん……でしたっけ？ 着ている服が妙に色気ないですね」

ここで会ったのも何かの縁、と思い少女に城（の中にある巨大な

街）を案内してもらっていた時、僕の方をちらりと見たと思ったら、彼女は控えめにそう言った。

ちなみに一緒に歩いている途中に聞いたのだが、彼女の名前はレシアというらしい。というか彼女は金髪金眼、肌は肌色という目立つ顔（他の魔族は僕もそうだが紫系色）なので他のすれ違う魔族たちに凄くじろじろ見られている。が、彼女はそんなこと気にしていないようだ。

話がずれてしまった。僕が着ている服は前世の勇者男普段着なので、色気がないので当然だろう。しかも今の体の大きさは小学四年程度なのでその服はかなりブカブカだ。ちなみに勇者男だったころは、高校三年くらいの体系していました。

まあそれだけなら一応女子が着ても大丈夫なのだが（地味な服で男子も女子も着れる服なので大きさを気にしなければ一応着ていられる）、今の僕の肌は真っ白で、髪は紫色だ。どうやってもそんな体に今着ている服は似合わない。

「あの、よかつたら私が奢りますから、服を買いに行きませんか？」

「……はい？」

「今なんていいました？ レシアさん？」

「服を買いに行きませんか？ って言っただんですよ。貴方の耳は節穴ですか」

心読むな女神。そしてそんなことは分かっている。

今僕の体は魔族であり、女なのだ。正直女物の服を悪のには凄く抵抗があるし、着るのも凄く抵抗がある。それに魔族の服って、悪趣味なデザインしてそうな予感がぶんぶんだ。

さあ行きましょう。とレシアは僕の体を引っ張ってどこかへ連れて行く。僕とレシアの体格はほぼ同じなはずなのに、僕は何の抵抗もできずレシアに引っ張られていった。レシアさん力強いな。いや、僕の力が弱くなってるだけなのかもしれないけど。

04：「服を買いに行きませんか？」（後書き）

凄く投稿が遅くなった割には話に進展がなくて申し訳御座いませんでした！

いや、こういう展開になったとはいえ何書けばいいか分からなかったので、遅くなってしまったんです。二度目ですが申し訳御座いませんでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838f/>

転生しちゃった勇者様

2010年10月25日00時44分発行